

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：30103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02067

研究課題名(和文) 戦後復興期労働運動の再評価：夕張炭鉱労組書記長日記(1947-62) 翻刻と分析

研究課題名(英文) Re-evaluation of post-war reconstruction labor movement

研究代表者

大國 充彦 (Okuni, Atsuhiko)

札幌学院大学・経済経営学部・教授

研究者番号：40265046

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)： 笠嶋一氏から寄贈された資料のうち、自筆の日記1948-1951年に関しては、後に炭鉱労働組合幹部となる一炭鉱夫の青年期の記録として資料的な価値が高い。1948-1951年の日記について、先行研究の炭鉱版となるように日記の解読を進め、資料として出版可能な形にした。同時に、敗戦後の炭鉱における労働と生活、公民館運動と青年社会教育、映画・演劇のかかわりからみる笠嶋氏の労働組合運動、1950年前後の政治史と炭鉱労働組合というテーマに関して、解説の作成を行った。

渦中にいた当事者の目線から当時の出来事を捉えていく中で、日本の労働運動のもうひとつの可能性をうかがうことができるかどうか考察を進めていく。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦後社会を支えた庶民の日記は、継続的に記述されていれば一次資料として価値が高いことは、歴史学・農村社会学分野でも明らかとなっている。歴史学分野で名高い『西山光一日記：1925-1950年新潟県一小作農の記録』(西田・久保1991)、『西山光一戦後日記：1951-1975年新潟県一農民の軌跡』(西田・久保1998)、最近では日本社会学会会長を務めた細谷昂氏が庄内地方の農民・阿部太一の日記に注釈をつけた『小作農民の歴史社会学』(細谷2019)等がある。本研究では、1948-1951年の日記について、これらの先行研究の炭鉱版となるように日記の解読を進めた。

研究成果の概要(英文)： Among the materials donated by Mr. Hajime Kasashima, the handwritten diary from 1948 to 1951 is highly valuable as a record of the youth of a coal miner who later became a coal mining labor union leader. His diary from 1948 to 1951 was deciphered so that it could be a coal mine version of previous research, and made it possible to publish it as a material. At the same time, I would like to create commentaries on the themes of labor and life in coal mines after the war, the community center movement and youth social education, Mr. Kasashima's labor union movement as seen from the relationship between movies and theater, and the political history around 1950 and coal mine labor unions.

As he captures the events of the time from the perspective of the person involved in the turmoil, he will continue to consider whether it is possible to glimpse another possibility of the Japanese labor movement.

研究分野：地域社会学

キーワード：日本の労働運動 炭鉱労働組合 生活史研究 もうひとつの可能性

## 1. 研究開始当初の背景

戦後日本の労働運動の中で、組織力や行動力の面において最も力を持っていたのが、炭鉱労働者による労働組合運動であった。近現代の労働運動の歴史を振り返ると、炭鉱労働者の運動の盛衰によって、労働運動の帰趨が決したといってもよい。それは日本だけではなく、産炭地における労働組合運動が盛んであった英国でも同様である。だが、英国をはじめ欧州などの労働組合運動とは異なり、日本の労働組合運動は「どのような労働者であっても『ひとかどの人間』として尊重される」という労働者の普遍的な要求を認めさせることができず、労働者の社会的連帯を構築できなかったと考えられる。現場の労働者自身が自らの生産労働を共同的に管理するあり様としての「労働者の職場秩序」を尊重することを求めた炭鉱労働組合にたいして、国家や資本家階級はつねにストライキを執行した元の組合(第一組合)を分裂させ、会社側と妥協し、就業を再開しようとする第二組合を形成することで、労働者の社会的連帯にくさびを打ち込んだのである。そして、労働組合運動は、生命や暮らしを守る前に、政治的な権力を求めて過激化することで一般大衆の支持を失い、労働者階級が労働者政党を介して、資本家階級と対等に国家の政策形成を担うという方向に進むことができなかった。結果的に、現在の日本と欧州では、炭鉱労働組合の退潮は同じであっても、社会全体における労働組合運動や労働者政党の位置づけが全く異なっている。この差はなぜ生まれたのだろうか。日本の労働運動にとってどのような別の道があり得たのだろうか。ここに本研究の核心をなす学術的「問い」がある。

研究動向の位置づけとしては、第一に、労働運動研究における炭鉱労働組合の研究は、日本炭鉱労働組合(炭労)を中心としたナショナルセクターに関する研究が中心であり、個別の炭鉱の労働組合の歴史は労働組合史が主となっている。南助松を研究し、南助松と同じ境遇にあった労働者を出自とする労働組合幹部であった笠嶋一氏の生活史を構成し、そこから炭鉱の労働組合の内実と労働組合の「あり得た可能性」を考察することで、労働組合の政治スタンスに共鳴した研究者による労働組合への視点とは異なった見解を提供できる。

第二に、日本における生活史研究では、中野卓や桜井厚の研究(中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』1995年ほか)などが「個人というフィールドにおいて作用する社会の重層的な効果の発見」(佐藤健二『社会調査のリテラシー』2011年)をしたとはいえ、個人にだけ焦点を当て、その社会的背景に言及することが少ない。近年、小熊英二『生きて帰ってきた男 ある日本兵の戦争と戦後』(2015年)や佐々木陽子『枕崎 女たちの生活史』(2017年)など、生活史の作成から日本社会や、ジェンダーや差別問題に言及する研究も登場してきたが、本研究は、炭鉱の労働組合を舞台として、この生活史研究の方向性をさらに発展させるものと位置づけることができる。

第三に、本研究は、近年研究が進んでいる1950年代の生活記録運動、サークル運動、地域文化運動研究のような無名の人々による活動を取り上げ戦後史の潜勢力を底辺から救出する作業とも接合し、運動の非連続性を主張する脱構築主義的な議論の相対化を企図する。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本における鉱山労働運動の先覚者である南助松(1873~1964年)の評伝を手がけ、北海道・北炭夕張炭鉱の書記長まで務めた笠嶋一(1929~2018年)の日記・手記を素材とした生活史記録を作成した上で、そこから北炭夕張炭鉱労働組合や日本の炭鉱労働組合の「もうひとつの可能性」を考察することである。では、なぜ、笠嶋氏の手記から、労働運動のもうひとつの可能性が考察できるのか。それは笠嶋氏が日本では希少な存在である労働者を出自とした炭鉱労働組合の指導者として活躍した南助松に着目し、自らも炭鉱労働者という出自から北炭夕張炭鉱労働組合の幹部として活動したからである。日本の労働運動や社会主義は、米国で労働問題や社会改良運動を学んだ知識人(片山潜など)によって担われたが、英国など欧州では労働者出身の運動家や政治家によって担われることが一般的であった。したがって南助松の影響を受けた笠嶋氏の組合活動の経緯を紐解くことで、労働者を出自とした労働組合運動の可能性と限界を理解することができる。それは日本ではなぜ労働者の運動にその始原をもつ普遍的な意味での社会的連帯が十分な広がりをもちえなかったのかという点だけではなく、ドイツのように学生運動や労働組合運動が緑の党という政党を生み出すようなことが、なぜ日本においては成立しなかったのか、韓国、台湾、香港では草の根の市民運動が活発であるのに、なぜ日本では運動が持続しないのかといった議論にも接続する。つまり、炭鉱労働組合運動の「もうひとつの可能性」を探究する中で、日本の社会運動の現状を逆照射することができるのである。

日本の社会運動研究や政治学では1970年代の公害問題に対する住民運動や市民運動の台頭に対して、労働運動を「旧い運動」と位置づけ、労働運動との非連続性が強調されてきた。当時の社会運動への理解の相対化、脱構築を目的とした歴史社会学(小熊英二による『民主と愛国』や『1968』など)でも、歴史的な非連続性を主張する議論が多く、労働組合運動の存在は、日本の社会運動研究の「蚊帳の外」に置かれている。しかし、最近の歴史学や社会運動史研究が1950年代の「名もない人々」の活動や声をすくい上げ、多様な運動との付置連関を記述しようとして

いるように、日本の労働運動と他の社会運動との接点を、草の根から照射することで、現在の日本の社会運動や市民社会の現状を理解することができるだろう。

本研究は、3つのプロセスに分かれる。第一に、2018年に寄贈された笠嶋一氏の資料の整理の再開である。すでに研究代表者の大國や研究分担者の新藤の指示のもと、札幌学院大学の研究補助員が南助松に関する資料のみを整理し『南助松伝 夕張・足尾からはじまった鉱山労働運動』（2015年）を刊行し一定の整理を行っている（この冊子の解題は研究分担者の玉野が担当している）。本研究では、まず、笠嶋一氏の手記（日記、メモ）の文字をデータ化する。1947～62年にかけてほぼ毎日書かれた日記のデータ、夕張炭鉱労働組合の幹部としての組合の活動記録、さらに笠嶋氏は何度も自伝を著そうとし、その構成メモが多く残されている。これらの手記をデータ化する作業が必要となる。

第二に、笠嶋氏の日記やメモのデータと、当時の社会状況を踏まえて、笠嶋氏の個人史の年表と、炭鉱労働者としての生活史を作成する。特に労働者出身の組合指導者であった南助松と同じ境遇である笠嶋氏が、北炭夕張炭鉱労働組合にどのようなまなざしを投げかけていたのかという点を中心に記述的に分析し、社会的背景を含めた形の生活史を作成する。

第三に、笠嶋氏の生活史の分析から、日本における労働組合の社会的連帯が不十分なものとどまったこと、ドイツの緑の党や英国の労働党のような、労働運動の政党化、体制内化が日本で起きなかった理由、東アジアの国々のように、なぜリベラルな草の根運動が持続しないのかといった、政治社会学、社会運動研究の問いに答えていく。さらに、炭鉱労働組合の運動の経験をもとに、LGBT・障がい者・女性・外国人への差別、バッシングといった今日の問題群において生起する同様の構造を解明したうえで、これらの問題に抗う運動の存立可能性やそれを可能にする社会的連帯のあり様を展望する。

### 3. 研究の方法

第一に、夕張炭鉱の労働者であり、その後、労働組合の幹部であった笠嶋一氏の残した資料（日記や手記など）を整理、分析し、笠嶋氏の炭鉱労働者としての生活史記録を再構成し、北炭夕張炭鉱労働組合の動態を把握する。炭鉱の労働組合の正史は数多く編纂されているものの、概括的な記述に終始している場合が多い。笠嶋氏は自分史を執筆する意向をもち、詳細な自伝メモが残されており、良質な生活史記録が作成できる。そして、特に労働者出身の組合指導者であった南助松と同じ境遇である笠嶋氏が、北炭夕張炭鉱に対してどのようなまなざしを投げかけていたのかという点を分析する。例えば、南助松が希求した「どのような労働者であっても『ひとかどの人間』として尊重される」という理念が、北炭夕張炭鉱労働組合にどのように受容され、「労働者の社会的連帯」を培ったのかという点や、南助松と同じ境遇である笠嶋氏が、南助松の悩みとどのように向き合ってきたのかという点を分析する。さらに、笠嶋氏の日記は1947年～62年までが最も分厚い記述がなされており、この時期は労働運動の叢生、レッドパージなどの弾圧、ナショナルセンター（総評）の発足、三池闘争などの労働運動の敗北などがあり、戦後日本の労働運動史にとって重要な時期である。この時期に一人の炭鉱労働者がどのように炭鉱労働組合に関わり、日本の労働運動を見ていたのか、個人史に還元されがちなこれまでの生活史研究とは異なり、社会的背景にも言及した生活史を描くことができる。なお、歴史学の分野では、新潟県一小作農の記録として知られる『西山光一日記 1925-1950年』（東京大学出版会）があるが、本研究はさしずめ『笠嶋一日記 1947-1962年』という炭鉱労働者の記録を作ることになるだろう。このように社会的背景に言及しながら記述する生活史研究の新たな方法論的展開が可能になること、労働組合の組織的活動の記録が主であった歴史研究に対して新たな視点を提供できることが学問的な独自性として指摘できる。さらに、歴史学や社会学において近年研究が盛んに行われている、1950年代の生活記録運動、サークル運動、地域文化運動研究のような、無名の人々による活動を取り上げ、戦後史の潜勢力を底辺から救出する作業とも接合し、政治史・経済史に限定されない、労働と生活の側面を含めた運動史の研究に、本研究も寄与することができる。

第二に、炭鉱労働組合の他にありえた「もうひとつの可能性」を考察することは、日本における労働組合における社会的連帯の不十分性、ドイツの緑の党や英国の労働党のような、労働運動の政党化、体制内化が日本で実現できなかった理由、東アジアの国々のように、なぜリベラルな草の根運動が持続しないのかといった、政治社会学、社会運動研究の問いに貢献する。

第三に、本研究の視座は、LGBT・障がい者・女性・外国人への差別に抗う運動の存立を可能にする社会的連帯の可能性を展望できる。人種、民族、出自にかかわらず、人として尊重されるべきという普遍的な理念による連帯を認めず、意見が違う少数派を排除する社会は、自己批判と創造性を失い、社会の機能不全を引き起こす。悲惨な炭鉱事故を引き越した背景には、経営者側が炭鉱労働者の社会的な共同と連帯を根こそぎ破壊し、その結果、労働者の労働意欲が低下したことや、労働者の人権を無視し保安体制を軽視したことがある。この炭鉱社会における社会的連帯の不全という課題が、今日のLGBT・障がい者・女性・外国人への差別に抗う運動の論理にも同様に存在することを析出する。このような課題設定が、LGBT 他運動への既存の理解と異なった独創的な解釈を生み出すことが期待できる。

### 4. 研究成果

笠嶋一氏から寄贈された資料の整理を行ってきた。資料のうち、自筆の日記 1948-1951 年に関しては、後に炭鉱労働組合幹部となる一炭鉱夫の青年期の記録として、資料的な価値が高いと判断した。戦後社会を支えた庶民の日記は、継続的に記述されていれば一次資料として価値が高いことは、歴史学・農村社会学分野でも明らかとなっている。歴史学分野で名高い『西山光一日記：1925-1950 年新潟県一小作農の記録』（西田・久保 1991）『西山光一戦後日記：1951-1975 年新潟県一農民の軌跡』（西田・久保 1998）、最近では日本社会学会会長を務めた細谷昂氏が庄内地方の農民・阿部太一の日記に注釈をつけた『小作農民の歴史社会学』（細谷 2019）等がある。

本研究では、1948-1951 年の日記について、これらの先行研究の炭鉱版となるように日記の解読を進め翻刻し、注釈・解説を加えたものを資料として出版可能な形にするように試み、2021 年度中には、日記の翻刻作業をおおよそ終えることができた。同時に、敗戦後の炭鉱における労働と生活、公民館運動と青年社会教育、映画・演劇のかかわりからみる笠嶋氏の労働組合運動、1950 年前後の政治史と炭鉱労働組合というテーマに関して、解説の作成を行った。

成果として『戦後日本の出発と炭鉱労働組合：夕張・笠嶋一日記 1948-1984』（御茶の水書房）と題する書籍を 2022 年秋に出版した。これは夕張（鉱・平和鉱・夕張新鉱）の炭鉱労働組合幹部であった笠嶋一氏の初期の日記の翻刻・解説を行った書籍で、戦後史研究・北海道地域研究・コミュニティ研究・生活史研究等に関わる人々からの反響が期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 中澤秀雄 新藤慶 西城戸誠 玉野和志 大國充彦 久保ともえ	4. 発行年 2022年
2. 出版社 御茶の水書房	5. 総ページ数 464
3. 書名 戦後日本の出発と炭鉱労働組合：夕張・笠嶋一日記 1948-1984	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	玉野 和志  (Tamano Kazushi)  (00197568)	東京都立大学・人文科学研究科・教授   (22604)	
研究分担者	西城戸 誠  (Nishikido Makoto)  (00333584)	早稲田大学・文学学術院・教授   (32689)	
研究分担者	新藤 慶  (Shindo Kei)  (80455047)	群馬大学・教育学部・准教授   (12301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------